

令和元年度第1回逗子市食育推進懇話会 概要

日 時 令和元年7月2日（火）14時00分から15時50分

場 所 逗子市役所5階 第2会議室

出席者

【メンバー】山崎美実子、◎佐野喜子、若林順子、森莊一、青木俊幸、大竹清司、森岡進、山崎夏子、筒井照代、澤木和代、川名裕

【事務局】廣末課長、西海副主幹、奥戸、柏木、伊藤

【傍聴者】なし

欠席者

【メンバー】堀川ノブエ、吉田久美子、鈴木孝久、桜井雅子

議事概要

1 開会

資料確認を行った。

2 自己紹介

事務局よりアドバイザー紹介、出席者氏名及び食育に対する考え等について自己紹介を行った。

3 議題

(1) 令和元年度逗子市食育事例集に係る内容確認について

ア 事務局からの提案

事前送付した「平成30年度逗子市食育事例集」について、本市の食育事例を蓄積し、周知と更なる推進のため、昨年度1年間に市が実施した取組みをまとめたものである。今後、庁内関係課の照会を経て、8月頃に公表したい。

については、各自査読の後、事例集の内容や食育の進捗状況等について意見交換を行いたい。

イ メンバーからの意見

事務局からの提案に対し、メンバーから次のとおり意見があった。

- ・以前よりも多く取組みが実施されている。全体を通して今後も継続してほしい。
- ・対象年代や性別、内容など、非常にバランスよく様々な事業が実施できていると思う。

- ・食すまでの一連の流れが体験できる事業があると、より理解が深まり、食育につながるのではないかと思う。
- ・食育については、家庭での意識の格差が大きい現状があると思う。意識の低い家庭へのアプローチが今後の課題ではないか。年代によって、食に興味を持つタイミングは様々であると思うが、気付きやきっかけを与えるために、今後も継続的に様々な年代の人を対象に食育を伝えるイベントや企画を実施していく必要があると思う。
- ・市がこれだけ多くの食に関する活動を実施していることを市民はあまり知らないのではないか。「こんなことをしている」、「こんな活動をしているのでぜひ参加してほしい」といった周知活動に力を入れてほしい。
- ・No. 12「おやつについて（油脂分・糖分）」、No. 13「朝ご飯の大切さについて知ろう」の取組みが評価できる。スポーツの減量のために朝食を抜き、そのまま試合をして成績が上がらない子どもや、朝ジュースだけ飲んで出かける生活習慣がある子どもの実体験が出たので、子どもの時からおやつの知識等について学ばせることは大切だと思う。
- ・昨今は科学調味料の味に小さい頃から慣れている子どもが多く、成長してから素材の味を覚えたり、慣れさせたりすることは難しい。子どもへの教育だけでなく、大人へも食の大切さをどう伝えていくかが、今後の課題だと思う。
- ・食育の事例が非常に多岐に渡っている。しかしその反面、これだけ多くの取組みがあると、それぞれの活動がどこに辿り着くのか不明瞭な感じがある。
- ・食の根本として、家庭という軸をひとつ考えると、小学生以下の子どもについては、時間が許す限り親子一緒に活動することを目指してほしい。
- ・食育推進計画における取組みの方向2「安心して食べられる」について、全ての売り手が消費者に安心なものを届けられているか、不安に思う。食育に関連していいものを扱っている取組みを吸い上げて、市民に伝えるアクションがあると、結果的に、「安心して食べられる」の目標が達成できるのではないか。

ウ アドバイザー講評

アドバイザーから次のとおり講評があった。

例えばPDCAサイクルで考えた時に、Check（評価）の段階で、どのように実施したらどの程度効果があったのか、その効果が偶然なのか必然性があったのかの目安を知らないと、多くの人に広まっていけないと思う。良い取組みでも、それを体験できる人数には限界があるため、取組みを繰り返すだけでなく、体験した人がその効果や感動を第三者に伝えることによって広めていくこ

とを考えていくことも食育事業だと思う。

例えば幼稚園の場で子どもを軸に親に発信する等、体験した人間や実施した取組みが最終的にどこにつながっていくかが分かると、すごく広がるのではないか。実施するだけでなく、その取組みや感動を広める仕組みを考えながら事業の見直しをすると、(食育事例集に掲載された)どの事業もおそらくもっと広まると思う。今日ここにいるメンバーが取組みを広めることも食育の推進につながると思う。

実施した事業を報告することは第三者が知る機会にもなるので、例えば「こういう取組みがあることを知っている人が増える」という点も、評価につながると思う。実施回数だけでなく、どのように市民に広がっているかを考えてほしい。

例えば、いい取組みをしている店舗の活動があまり知られていない場合、店舗の壁にPRすることで、購入しなくても店舗の前を通る多くの人がある取組みを知ることができる。

体験だけが評価や効果だけでない。各団体の取組みや考えを知らせていくことも大切だと思う。

エ 事務局からの連絡

発表された意見は各課へフィードバックし、事業改善の参考にするほか、今後の食育関連事業の構築に役立てる。この会議の後で意見等があれば7月5日(金)までに連絡してほしい。

(2)重点目標の推進について

ア 事務局からの提案

今年度の重点目標である「旬を意識して食材・食料品を購入する市民の増加」について、それぞれの活動で旬について触れる機会があるか、どのように旬を伝えているか、また伝えていない場合の理由や今後考えられる機会等について意見交換を行いたい。

イ メンバーからの意見

- ・現代では自然の中で旬を体験する機会が少ないので、店舗で旬の食材が紹介されているとか、田舎から旬の食材が送られてくるといった、人を介した旬の自覚が多いと思う。
- ・旬は期間が短いものなので、つい忘れて過ぎてしまうことがある。
- ・例えばキャンペーンを行い、お店の人たちに旬や季節感をPRしてほしい旨依頼するとか、学校給食のメニューに旬マークを付けるなどを通して、啓発できるのではないかな。
- ・私たち大人の世代でも旬について分かっているか疑問である。通年様々な食材が買える今日では、旬を意識する機会が少ない。

・旬を知るには、幼稚園での野菜作りや地元の魚屋で旬の魚を見ることなど、体験することが大切。魚屋から魚の説明を聞いたり、自分で野菜を育てることで、その食材に対する興味・理解が深まると思う。個人的には山菜の生える季節に子どもとヨモギやフキ採りをし、近所の子ども達とヨモギ餅づくりを行うことで旬に触れている。

・個人レベルでは、家庭菜園や釣りを通して旬を実感することができると思う。

・大型直売所「すかなごっそ」では地場の食材が8割を超えるので、そこに来てもらうことで旬が分かる。また、子どもやシニア世代に向けての農業体験、観光農園での果物狩り（いちごやみかん、さつまいも等）を通しても旬を感じることができる。

・スーパーに行っても旬が分かりにくい。

・地元の魚等を紹介した旬カレンダーがあり、様々な場所に置かれると周知に役立つのではないかな。

・給食だより等を通して旬の食材を説明すると、周知につながるのではないかな。

・親に伝えてもらわないと分からないので、親を通して子どもに伝えていきたい。

4 その他

事務局より、今年度の懇話会日程等について連絡があった。

5 閉会